

P1

みことば「シメオンとアンナの喜び」聖書 ルカによる福音書第2章21～40節 愛宕町教会牧師 宍戸俊介

クリスマスの嬰兒の誕生から40日が経過して母マリアの体調も回復し、礼拝に再び参加できるようになった時、ヨセフとマリアは嬰兒イエスを連れてエルサレム神殿に詣で、律法の規定通りにマリアとイエスの贖いの献げ物をささげました。

レビ記12章に産婦は40日間けがれていて、聖所への出入りを禁ずることが記されているのですが、これは言葉の厳しさとは違って、実際は体力を消耗した産婦に対する健康上の配慮をこのように表現したものとされています。礼拝に復帰する際には焼き尽くす献げ物と贖罪の献げ物をささげたのですが、これには無事に出産の時を守られた感謝の意味合いが含まれています。基本は雄羊一匹と鳩一羽でしたが、貧しい人は鳩二羽でも良かったのです。また、出エジプト記の13章にすべての初子は主のものであると宣言されていて、父親は神様にその子の贖い(身代金)を支払うように定められていました。

ヨセフは、妻と子の二人分の献げ物を携えてエルサレム神殿に上り、子が与えられてから初めての家族全員そろった礼拝をささげたのですが、その折、神殿の境内でシメオンという老人とアンナという女預言者に会っています。

シメオンは「正しい人」--律法を完全に行おうと志す人たちが敬意を込めてこう呼ばれていました--であり、敬虔で、当時の民と腐敗した神殿の現実に心を痛めていたのです。まもなく救い主が現れ、イスラエルの民を神様の民として相応しく導いてくださるに違いないと信じてメシアを待望するサークルのメンバーでもありました。彼の上に聖霊がとどまっていたと言われていますが、これはシメオンが預言者だったことを示す言葉であるようです。

アンナの方は高齢の女預言者と紹介されており、またエルサレムの救いを待ち望んでいる人々に幼子イエス様のことを紹介しています。ですから、この二人はお互いによく似かよっていたようです。いずれも高齢で預言の賜物を与えられており、また、救い主の訪れを待ち望んでいたのです。

アンナがどのように主イエスのことを語ったのかは、残念ながらここに記されていません。一方、シメオンの言葉は書き留められています。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」(ルカによる福音書2・29～32)

シメオンはこれまで、深い嘆きと憂いを抱えて生きてきました。エルサレムの現実が、神様の民として歩むべき姿から大きく隔たり、かけ離れていたためです。大祭司を初めとする貴族層の祭司たちは私腹を肥やすことに血眼になっていました。一方、民はそんな高級祭司たちのありように失望して、一般の信仰生活は緩み切っていました。御言葉に聞き、御言葉に従って生きるはずのイスラエルの民の姿は、まことに見えにくいものとなっていたのです。

ですから心ある人々は「イスラエルの慰め」を待ち望まざるを得なかったのです。シメオンやアンナを含む救い主メシアの訪れを待ち望む人々のサークルが、エルサレムだけでなく、ユダヤの各地に生まれていました。

ですが、そのようなメシアを待望する人々は、エルサレムの高級祭司たちや為政者にとっては、うっとうしい存在でした。ですから、メシアを待ち望む人々は、様々な難癖をつけられては同胞から迫害されることが多かったのです。シメオンは、そんな風に迫害され、傷ついた仲間たちを、御言葉によって慰め、励ましながら、これまでは生きてきました。

ところがこの日、シメオンは嬰兒との出会いを通して、彼のこれまでの戦いの日々から解放されたことを感じます。境内で出会った嬰兒の中に「救いを見た」からでした。

シメオンの預言はこれまで、「今にきっとメシアがやってくる」ことを宣べ伝え、目覚めて待望に生きるべきことを述べていたのですが、今やその成就を見たとき、シメオンは聖霊に感動させられ語ります。

主が共にいてくださる時が始まったことを感じて喜ぶシメオンとアンナの姿は、先ぶれとしての洗礼者ヨハネの務めを指し示す、更なる先ぶれようなところがあります。

主イエスは神様の民にまことの慰めをもたらす方としておいでになりました。この時、わたしたちは、そういう主に心に向け、救いと慰めを祈り求め、また、主が共にいてくださることに感謝したいのです。

P2

受洗にあたって「信仰告白」

信仰告白

横倉 侑子

私がキリスト教に出会ったのは山梨英和高校に入学したことがきっかけです。最初は聖書の言葉や先生方のお話の意味が理解できず、受け入れるのにとっても時間がかかりました。特に、神様に選ばれて入学したと言われたときにはとても困惑しました。しかし、高校の部活で聖歌隊に入り奉仕などの活動していく中で、キリスト教に対する複雑な気持ちは少しずつ無くなっていきました。

また、学校での友達との交わりで理解できた部分もあったと思います。その内、毎日の礼拝が日常の一部となり、今ではなくてはならない存在となっています。特に、高校3年生の時には部活や勉強の面でとても辛く、挫折そうな時もありましたが、神様がそばにいてくださるという言葉に励まされたことが私の中でキリスト教の存在を大きくしてくれたものだと思います。

最初愛宕町教会に来たのは、学校の長期休みの課題のためでした。その時に教会の方が優しく迎え入れてくださったことを今でも覚えています。そのため、この教会で受洗できることをとても嬉しく思いますし、ここまで導いてくださった神様に感謝したいと思います。

(2020年5月31日ペンテコステ礼拝にて受洗)

信仰告白

横倉みさ子

私が、キリスト教と深く出会うきっかけとなったのは、現在大学生の娘が、山梨英和高等学校に入学したことであります。

昨年までの3年間、娘は神様について学校で学んだ事を、何度となく感慨深く私に話してくれました。

一方の私はと言うと、そんな娘の話は聞き流していました。保護者として参加する学校行事で、毎回神様への感謝の祈りをするのですが、当初は、周りの皆さんに合わせて、ただ言葉を口にするだけの心情であったかと思えます。

そのような日々を過ごしていました時、友人の誘いもあり、保護者向けの、宍戸尚子先生主宰による「聖書に親しむ会」に参加することになりました。およそ月1回のペースで1年間、聖書の内容について理解を深め語り合う機会をいただきました。それを機に、文字通り、聖書が身近になり、日頃感じている思いは、全てここにあるのではないかと、感じるようになりました。

そして、娘に同行し愛宕町教会で礼拝を捧げ、聖書の言葉をお聞きする度に、その思いは強くなりました。

いつの間にか、私から発せられるのは、言葉合わせのように唱える言葉ではなく、祈りを捧げているのだと感じたのです。

このような道を辿り、宍戸先生から受洗準備のご教示をいただき、今日の洗礼の日を迎えることができましたことは、神様のお導きであることに他なりません。

娘から聞いた学校での教えや、学校行事でただ唱えていた感謝の言葉も、実は、今日の日を迎えるために、神様が作られた道の一部であったのだらうと感じます。

これからの日々が、神様と共にあることを感謝しつつ過ごして参ります。

(2020年5月31日ペンテコステ礼拝にて受洗)

写真キャプション「礼拝後、お二人の愛唱讃美歌「いつくしみ ふかい」を皆で賛美し、教会から受洗のお祝いをプレゼント。コロナ終息後の愛餐会でのお祝いを楽しみに。」

P3

新型コロナウイルス感染拡大の渦中で

「感染症の中で」 宍戸俊介牧師

2020年。この年は新型コロナウイルス(COVID-19)が世界中で猛威を振るった年として、歴史の上では記憶されることでしょう。キリスト教会も感染症の影響を受け、様々なことを経験しました。

日本基督教団は感染症に対するガイドラインを発表して、賛美を控え声を出さないようにするとか、ネットの礼拝を活用するとか、礼拝に時間制限や人数制限を設けるといような、いささか親切すぎる提案をして、諸教会の危機意識を覚醒させようと試みました。

このような状況の中で愛宕町教会はどのように対応したのでしょうか？ 具体的な対応については書記の古屋秀樹兄が書いてくださっています。私はどのような理念でこの危機に対応したかを記すように「いづみ」の編集部から求められましたので、そのことについて記してみようと思います。

★
意外に思われるかもしれませんが、感染症が広がり始めて日本社会が不安を感じ始めた時にも、私は特段な変更が必要だとは思いませんでした。もちろん、マスクを着用して手指の消毒をするとか、いわゆる「三密(密集・密閉・密接)」を避けるという基本的な対応は大事です。けれどもそれ以上に、例えば礼拝時間の短縮であるとか、賛美を控えるとか、「集う」ことを止めてネットの礼拝に切り替えるとか、そうした対応の必要性を全く感じませんでした。感じないどころか、対応を誤ることは教会の死活問題につながりかねないさえ思ったのです。

教会は社会に対して責任を負っています。それはいわゆる「キリスト教国」と呼ばれるような、キリスト者が多数を占めているような社会でも、あるいは日本のようにキリスト者が比較的少数の社会でも同じです。キリスト教会はどこの国にあっても、その社会に対して教会としての責任と使命を果たさなくてはなりません。しかしながらその使命は、感染症を蔓延させないことで果たせるようなものではないでしょう。

教会の使命は何か？—イエス様が教えてくださっています。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を受け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28・18~20)。

教会の社会に対する使命は、わたしたちがふだん生活している社会の上に神様がおられる、ということを示すことでしょう。イエス様はそのことを、「わたしは...一切の権能を授かっている」、「あなたがたはすべての民をわたしの弟子にきなさい」、「彼らに...洗礼を受け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」とおっしゃいました。

この命令のために、教会は単に社会の良き同伴者である以上のことを求められているのです。日本国の政府が感染症の蔓延阻止や生計が成り立つようにゴートゥキャンペーンを第一に考える時も、教会は最善のこととして、別のものに目を向けなければならない場合があります。即ち、神様がきっと守ってくださいと信じて、神様をあがめ、礼拝することが第一に考えられるべき場合があるのです。

しかし、もちろん感染症対策をおろそかにする訳ではありません。毎週、手洗いと換気を大事に考え、礼拝前後の消毒やマスクの着用をお願いしているのはそのためです。神様の保護は、わたしたちが怠惰になるためのものではありません。

★
ですが、毎週、指先を消毒し(体温を測り)、換気を注意しながら礼拝を捧げているうちに気づいたことがありました。現在は礼拝が一階と二階の二つのフロアに分かれて捧げられています。でもこれは決して当たり前の状態ではありません。本来は礼拝に「つどう」民が一堂に会し、皆で一緒に神様を讃えることこそ、本来の姿であるはずですが、二つのフロアで礼拝しているうちに思わされたのは次のことです。神様は、私たちがたとえ距離をとっても一堂に会することのできる、そういう教会堂を求めておられるのかも知れません。それならば、今回のウイルス騒動は、教会の伝道にとっても意味を持つのではないのでしょうか。

イエス様の伝道命令は「すべての民をわたしの弟子にきなさい」ということです。これは私たちに引き付けて言うなら、甲府市内、県内のすべての人々が福音を伝えるべき相手だということです。

神様は、今回の騒動を通して、私たちの教会を叱咤激励しておられるのかも知れません。人間の思いではなく神様の御心に従い、御心に仕えるあり方をハッキリと与えられて歩みたいと願うのです。

P4

2020年3月 からの礼拝生活を振り返って

役員会からの報告

教会員の信仰の日々

【役員会から】

「感染症対策のこれまで」 古屋 秀樹

この1年の愛宕町教会での新型コロナウイルス感染防止対策を振り返ってみたいと思います。

国内で感染者が発生し政府から注意喚起が出され、3月役員会で以下4点を決定しました。①トイレと台所に石鹸とペーパータオルを用意し玄関に奨励文を掲示して手洗いを励行する。②受付に予備マスクを用意する。③コイノニアの食事提供を4月の第一週まで停止する。④3月の婦人会は中止する。

その後感染が徐々に拡大し、小中高校の全国一斉休校、緊急事態宣言発令となり、「この状況では各人が行動を自粛し、ソーシャル・ディスタンスを確保して三密を避ける感染防止策をとらなければ医療が崩壊する。これを防ぐための自粛は自分だけでなく他者の命をも救うことである」と言われました。これを受けて教団の注意喚起も礼拝実施や賛美に消極的に変化し、教団内でも、礼拝停止、オンライン礼拝、出席制限、賛美の取止め、などの動きがみられはじめました。

そこで、役員会は4月4日(土)に緊急に臨時役員会を開き対応を協議しました。礼拝・信仰、この世の生命に関わる重要な問題であるため、様々な議論が真剣に交わされました。結論は可能な限り感染防止対策を取りながら教会堂に集って通常どおりの礼拝(聖餐式も含む)を捧げるということでした。

決定事項は、①礼拝は通常どおりで実施。換気徹底のため窓を開放し防寒への留意を促す。②着席間隔が気になる人のため大集会室を「第二礼拝堂」として使用する。③手洗い、手指消毒液(十分な量を購入)の使用、マスク着用を呼びかける。④コイノニアは当分停止する。⑤礼拝前後、机、手すり、ドアノブ等を消毒液で拭く作業を行う。

この時の決定が原則的には現在まで守られています。

5月、6月の役員会では、着席間隔については長椅子で互い違いに座る方式とし、着席場所にシールを貼付しました。長欠者には牧師・役員が訪問聖餐を実施することとなりました。7月役員会では1階の礼拝者に祝祷の音声がかかるようにマイクの使い方を工夫しました。教会行事については、夏期伝道実習、全体研修会、バザー、クリスマス祝会は中止としました。

10月以降の役員会では冬に向かう季節での換気が問題となり、ストーブを購入、強制換気方式(全ての窓を開放するのではなく、玄関で入れた外気を1階第二礼拝堂で温めて2階へ流し更に温めてオルガン横から排気する)を取り入れました。これで暖かい温度を保って必要な換気が確保されています。

(書記役員)

「コロナ感染症対策」有泉美津子

1月に世界中で広がり始めた「新型肺炎」ですが、教会生活が脅かされるようになるとは思ってもよらないことでした。

ソーシャルディスタンスを保ちつつ、70～80名が礼拝を守るにはどうしたらよいか役員会で考えました。礼拝部としても、部会を開き対策を申し合わせました。

礼拝に来る方が、不安を抱かず礼拝に集中できるように、受付では、まず手指の消毒、マスクの着用などを呼び掛け、出席簿の記入は、筆記具からの感染を考慮し、受付担当者がすることとしました。また、受付担当者は、多くの方々と直に接するので、自身も度々手指消毒など注意するよう確認しました。

次に、礼拝堂や手すり、エレベーター、ドアの取っ手など触れる機会の多いところの消毒除菌を礼拝前に行うこととしました。礼拝堂では、間隔をとって座れるよう、座席にシールを貼り、密にならないように工夫しました。大集会室を「第二礼拝堂」とし、音声のみですが、礼拝を守れるようにしました。

これから冬に向けて、寒さ対策が必要になってきます。役員会でも話し合われていますが、礼拝環境が整えられますよう、祈り求めたいと思います。

愛宕町教会では、幸いなことに一度も途切れることなく礼拝が守られています。聖餐も讃美も守られています。本当に感謝です。一方でこの感染症のため外出がままならず、礼拝に出られない兄弟姉妹方もおられます。週報を送るなどして、繋がりが途切れないようにと願っています。

皆が礼拝堂に集い、心おきなく讃美の歌声を響かせることができる日が一日も早く来ますように、静かに忍耐強く皆で祈り続けてゆきたいと思います。(礼拝部担当役員)

「コロナ禍にあって教会学校の今」渡辺 春美

2020年3月、コロナウイルス感染予防のため山梨県内でも、小中高の学校が休校となりました。3月以降、教会学校中高科の礼拝は、3階から1階大集会室に移され、マスク着用、換気、消毒、距離をとっての着席など守りながら、毎週中高生と共に、礼拝と分級を守っています。夏休みには大勢の英和生も礼拝に加わりました。

また、9月からは毎月第二主日に、2歳から8歳の子供たちと親たちのひよこ礼拝を守ることができるようになりました。短い時間で楽しく、礼拝と分級を続けていけたらと願っています。

コロナ禍の今、教会学校のほとんどの行事が中止となってしまいましたが、4月11日には子供たちと共に、イースターエッグを作り、12日には卵探しをし、教会員の方々にイースターエッグを手渡ししながら、イースターをお祝いできたことは、本当に喜びであり感謝でした。

夏休みも2週間と短縮されたなか、8月15日に、石和教会と合同の夏期フェスティバルを行うことができたことは感謝でした。密にならないように、ゲームをビンゴにし、お餅やじゃがバターはパック詰めにするなど、様々な注意を払いました。参加して下さった親子も、久しぶりの交わりに立ち去りがたく歓談していました。また、夜には中高生の花火の会も行いました。

教会にとっても、また、教会学校にとっても、このコロナ禍での生活は、親しい交わりを絶たれ、楽しみを延び延びにされるような生活となっています。長くお休みしている子供たちや、聖愛幼稚園の子供たちをお誘いする機会も絶たれ、残念な思いでいっぱいです。しかし、そんな中でも共に礼拝を守り、御言葉に聞き、祈る大切さを味わう歩みとなっていることは、何にもまして良い経験になったと思います。

大人も子供も、この感染症を克服し、平安のうちに歩むことができるように、祈っていききたいと思います。(教会学校校長)

【教会員から】

「新型コロナ禍での教会生活」河野 和彦

新型コロナウィルス禍が続く中も、聖日礼拝を守ることが許されており感謝です。

礼拝堂は二階だけど一階の大集会室をも第二礼拝堂として同時分散礼拝が守られているのは幸いです。説教者、司会者や感謝祈禱の音声は拡声装置を通して両礼拝室に流れる仕組みもあり嬉しいです。三密を避けて両礼拝室とも座席一列ごと交互に一人掛けと二人掛けとして着席マークが張っており、ディスタンスも配慮されています。

いつもは礼拝が終わると穴戸先生は礼拝堂出口に立ち、会堂を出る私たちに笑顔で挨拶されておられたが、最近は教会堂玄関の外にて見送られる。

私も2回ほど階下で礼拝に参加しましたが、若干聴力低下もあるのでFM補聴の世話になりたく二階礼拝堂の利用を心がけています。

7月に一回だけ礼拝を欠席しました。運転免許更新を前に視力劣化が心配になり眼科医師を訪れました。幾つかの検査の結果、両眼とも白内障が進んでいるとの診察結果でした。まず左眼から手術を受けましたが、その眼科医の手術日は月一回、日曜日だったのです。次の聖日は自分で車を運転して出席できました。

暫定仕様の運転用メガネで試験を受け、初めての「眼鏡使用」を条件に運転免許を取得できました。次の更新期は90歳の誕生日、それまで運転を続けられるか。子供たちは返上したらと言うが、公共交通機関を使わずにドアツードアで礼拝に参加できるのも感謝です。

多くの教会で一時礼拝を止めたり、午前中に2回、または午前午後の二部に分けたり、さらには出席できない人向けにフェイスブックを利用して礼拝の動画を流したりと、苦難の選択、対応をしています。

防疫上のルールを守らずに礼拝を続けて教会発のクラスターを発生させた教会があり、教会総連合会が国民に謝罪した国もあるとのこと（信徒の友10月号の世界キリスト教情報）。新型コロナ禍の中でいかにして礼拝を守るか、教会にとって試練の時でもあるのですね。

「『すべての事が、相働きて益となる』（ローマ8・28)の御言葉を信じて」影山笑美子

私がお世話になっています老人ホームでは、ここ近年、1月2月は、インフルエンザの予防のために外出が自粛となっています。今年もそのときが来まして、外出自粛となりました。2月半ばに入ってきますと、そろそろ外出自粛が解除され、礼拝にもあずかることができると、心待ちにしていました。

ところが、そのような期待は破られ、新型コロナが流行ってきているので、外出自粛は継続ということになってしまいました。そして現在、10月を迎えています。その状況は変わらず引き続いていきます。

週の初めに、ある緊張感をもって身なりを整え教会に行き、礼拝にあずかりますと、新たな思いで一步を踏み出せることに安心感を覚えます。御言葉をいただき、神様の御臨在を再確認し、どんな時にも寄り添ってくださる主の深い御愛を知らされますと、喜びがこみ上げてきまして、前に向かうことができます。

礼拝にあずかることができない今、そのような生活のリズムが崩れ、なんとなく空虚な思いがいたします。周りが未信者の方ばかりの中で、礼拝にもあずからないでいますと、神様との交わりが薄れてきそうで不安になります。

そのような中にありまして、神様は、インターネットによる礼拝の場をお備えくださっています。穴戸先生、尚子先生はじめ愛宕町教会でのその他の先生方の説教も、ご配慮によりまして、音声で拝聴できますので、たいへん感謝の思いです。

誰もが、生きにくい生活を強いられている感染症が一日も早く収束いたしまして、世界中の人が、安らかな日々を過ごせますよう、切に祈らないではいられません。

神様は「試練には、必ず逃れる道を備えてある」、「すべての事が、相い働きて益となる」とおっしゃってくださっていますから、いつか、この御言葉をしみじみ味わう時が来ますことを待ち望みつつ、再び皆様と共に礼拝にあずからせていただきたいと思います。

「コロナ禍での信仰生活」花輪 美名

新型コロナウイルスによる活動自粛が本格的になったのは、娘が一歳を過ぎて歩けるようになり、これから春夏と楽しいお出かけの季節が待っていると
思っていた頃でした。初めは得体のしれないウイルスへの恐れから、子供たちを無事に守ることができるのだろうかと不安な気持ちで一杯でした。

4月7日、楽しみにしていた息子の入園式は、前日夕方の連絡で中止に。しばらく登園自粛が続き、初登園は5月下旬になりました。

入園式が中止になったのは残念な反面、ほっとした気持ちもありました。長男と過ごす時間が少し伸び、家の庭でシャボン玉や水遊びなどをして沢山遊
びました。子供たちとたっぷり遊ぶことができた二か月弱は、神様からのプレゼントだったような気がします。コロナ禍での登園や、初めて息子と離れる
ことへの心の準備が自然にできていきました。また、何でもない日常のありがたさを再認識し、幸せを感じることができました。

教会生活では、世の中の緊急事態宣言や息子の登園自粛期間に合わせ、約二か月間礼拝を欠席しました。同居している義両親は信仰が異なるので、幼い
子供たちを連れて外出することで余計な心配をかけてはいけなと考えたからです。家族の気持ちを考えながら自粛期間を過ごしたことで、6月からはスム
ーズに教会生活を再開することができました。

コロナ禍は今も終息の兆しが見えません。しかし、長引く閉塞感の中、いつも通り教会へ通うことで自分自身の日常が守られ、平常心を保つことができ
るのだなあと、神様に感謝しています。何事も人間の思い通りにはなりません、最後は神様が守ってくださると信じて、祈りつつ主に委ねていきたいで
す。

最後に、大切な人を失い暗闇の中にいる人、仕事を失くして苦しんでいる人など、辛い思いをしている全ての人々に神様が光を示してくださいませ
う、心からお祈りしています。

P6

転入会しました...

「主の御手に守られて」豊田 香織

「神様って飛び込んだじゃいなさい。良いことがいっぱいあるからね。」

満面の笑みを浮かべた鈴木顕栄牧師は、力強いお言葉で16歳の私を、神様の御許に導いて下さいました。英和を卒業後上京。永福町教会を経て、当時住
まいから近かった東京府中教会に招かれました。昨年10月までの41年間、就職・結婚・三人の子育て・両親の介護そして看取りと、人生の大半を神様の愛
の御手に守られ生かされたことは、本当に感謝の念に堪えません。

愛宕町教会で信仰の道を与えられ、東京府中教会では奏楽の奉仕をすることで、かろうじて教会と繋がっていた時期もありましたが、同世代の姉妹方や
牧師夫人ら、そして信仰の先輩方との交わりを通し、知らず知らずの内に母教会でまかれた種が育てられたことは、大きな神様のご計画であったと思わず
にはいられませんでした。

夫はよく冗談で「俺はお前をキャンセルできるけどお前は絶対できないな」と言います。本当にその通り。神様が愛宕町教会の近くに実家のある夫をお
与え下さり、人生の後半生をこのような恵みに満ちた環境の中で、教会を中心とした生活を送ることができることは。なんという恵み、なんという喜びでし
ょうか。信仰弱き私をどこまでも大きな愛で包み、お導き下さる神様。昨年11月に母教会に戻ることに許され、本当に只々感謝の日々を過ごしております。

12月、キャロルの練習やケーキ作りに加えて頂き、主のご降誕を共に祝い、讃美の奉仕ができたこと。コロナ禍の中初めて経験した聖書全巻通読。全て
が満たされていました。礼拝は、正に聖書の説き明かしであり、牧師先生のメッセージと祈りは、聖霊に満ち溢れた会堂の中で、主の御声として心に染み
入るのでした。また、初めて出会う熱き祈りの兄弟姉妹には、学ぶものがありました。

「愛を持って互いに仕えなさい」。この教会の群れは、まさにこの御言葉を実践している兄弟姉妹で溢れています。私も貧しい器ですが、用いていた
だけよう祈っております。

今年はコロナ感染症の為、多くの行事が中止となり、全て経験できませんでしたが、来年以降、主によってなされる教会行事に共に携われるよう、祈り
つつ楽しみに致しております。

(2019年11月5日主日礼拝にて転入)

編集後記

▼コロナに振り回された忘れられない2020年でした。コロナ禍に愛宕町教会がどのような思いで礼拝を守り続けたか、記録に残すことが大事と編集方針を
決め、それぞれの方に書いていただきました。緊張下での神の御言葉は私たちにとって慕わしいものです。クリスマスを迎えます。「見よ、新しいことを
わたしは行う。今や、それは芽生えている。あなたたちはそれを悟らないのか。わたしは荒れ野に道を敷き、砂漠に大河を流れさせる」(イザヤ書43章19
節)。神様から新しい恵みが与えられることを喜びたいと思います。(K.S)